

浄土三経往生文類の研究(結)

巖城孝憲

観経往生総論

観経往生といふは、修諸功德の願により、至心発願のちかひにいりて、万善諸行の自善を回向して、浄土を欣慕(広本にのみ左訓 ねがふしたふころ)せしむるなり(略本 せしむ)。しかれば(略本 また)、『無量寿仏観経』には、定善・散善(略本には付加 を分別し)・三福九品の諸善、あるいは自力の称名念仏をときて(略本にはこの一五文字なし)、九品往生をすすめたまへり(略本 すすめしむ)。これは他力の中に自力を宗致(広本にのみ左訓 ねとす)としたまへり(略本 これ他力の中の自力なり)。(略本 これを観経の宗とす)このゆへに観経往生とまふすは(略本 といふ)、これみな方便化土の往生なり。これを双樹林下往生とまふすなり。

至心発願の願(略本 修諸功德の願文)、『大経』にのたまはく。「たとひわれ仏を得むに、十方の衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、至心発願してわが国に生れむと欲はむ。寿終らむ時に臨まむに、たとひ大衆と圍繞(広本にのみ左訓 かこみめぐる)してその人の前に現ぜずば、正覚を取らじ」と。

(略本にのみあり 修諸功德の願文)また『悲華経』「大施品」にのたまはく。「願はくは、われ阿耨多羅三藐三菩提を成りおほらむに、その余の無量無辺阿僧祇の諸仏世界の所有の衆生、もし阿耨多羅三藐三菩提心を発し、もろもろの善根を修して、わが界に生れむと欲はば、臨終の時、われまさに大衆と圍繞してその人の前に現ぜべし。その人、われを見て、すなはちわが前にして心に歓喜を得て、われを見るをもつてのゆへに、もろもろの障礙を離れてすなはち身を捨ててわが界に來生せしめむ」と。^[註1]

『教行信証』の「化身土巻」「本巻」の標挙においては、「無量寿仏観経の意 至心発願の願」とあり、その次には、「邪定聚機」と「双樹林下往生」が併記されている。その次には、「阿弥陀経の意なり」とあり、次に、「至心回向の願」とあり、次に、「不定聚機」と「難思往生」が併記されている。御自釈においては、第19願については、次のように述べられる。

しかるに濁世の群萌、穢悪の含識、いまし九十五種の邪道を出でて、半満・権実の法門に入るといへども、真なる者は、はなはだもって難く、実なる者は、はなはだもって希なり。偽なる者は、はなはだもって多く、虚なる者は、はなはだもって滋し。ここをもって釈迦牟尼仏、福德蔵を顕説して群生海を誘引し、阿弥陀如来、本誓願を発してあまねく諸有海を化したまふ。すでにして悲願います。「修諸功德の願」と名づく、また「臨終現前の願」と名づく、また「現前導生の願」と名づく、また「來迎引接の願」と名づく。また「至心発願の願」と名づくべきなり。^[註2]

ここに、第19願の願名が、「修諸功德の願」「臨終現前の願」「現前導生の願」「來迎引接の願」「至心発願の願」という5つの願名が示されているが、そのうち、前4願は、「復(また)」の字、最後の「至心発願の願」だけが、「亦(また)」という字によって示され、しかも「名づくべきなり」と言われている。本願文中の表現にもとづき、宗祖独自の命名である。

第20願の願名については、後述することになるが、ここでも見ておく必要があるので、示すならば、「化身土巻」「本巻」において、次のように、述べられている。

しかればすなはち釈迦牟尼仏は、功德蔵を開演して、十方濁世を勧化したまふ。阿弥陀如来は、もと果遂の誓いを発して、諸有の群生海を悲引したまへり。すでにして悲願います。「植諸徳本の願」と名づく、また「係念定生の願」と名づく、また「不果遂者の願」と名づく。また「至心回向の願」と名づくべきなり。^[註3]

ここでも、最後の「至心回向の願」だけが、「亦」という字によって示されており、宗祖独自の命名である。

観経往生について、広本には、「これは他力の中に自力を宗致としたまへり」とあるが、略本には、「これ他力の中の自力なり」とある。定善散善を説く観経の、隠頭の隠で語られていることはもちろんである。第20願による、後出の弥陀経往生の所においては、略本にのみ、「このゆへに弥陀経往生といふ、他力の中の自力なり」とある。19願と20願は、ともに「他力の中の自力」と言われる。第19願は「仮令の誓い」と言われ、第20願は「果遂の誓い」と言われているように、第18願から開かれた願であるから、そのように言われるのであろう。

「他力の中の自力」ということは、『教行信証』においては、「信巻」に、「横出は正雑定散、他力の中の自力の菩提心なり……」^[註4]と述べられている。『末灯鈔』には、「他力の中の他力」と「他力の中の自力」が対比して説かれてい

る箇所がある。

来迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆえに、臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし。いまだ真実の信心をよざるがゆへなり。また十悪・五逆の罪人のはじめて善知識にあふて、すすめらるるときにいふことばなり。真実信心の行人は攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心さだまるとき往生またさだまるなり。来迎の儀式をまたず。正念といふは本弘誓願の信樂さだまるをいふなり。この信心うるゆへにかならず無上涅槃にいたるなり。この信心を一心といふ、この一心を金剛心といふ、この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力の中の他力なり。また正念といふにつきてふたつあり。ひとつには定心の行人の正念、ふたつには散心の行人の正念あるべし。このふたつの正念は他力のなかの自力の正念なり。定散の善は諸行往生のことばにおさまるなり。この善は他力のなかの自力の善なり。この自力の行人は、来迎をまたずしては、辺地・胎生・懈慢界までもむまるべからず。このゆへに第十九の誓願に諸善をして浄土に回向して往生せんとねがふひとの臨終には、われ現じてむかへんとちかひたまへり。臨終まつことと来迎往生といふことは、この定心・散心の行者のいふことなり。^{〔註5〕}

この手紙は、来迎思想を、諸行往生と断じた手紙として有名なものである。自力の行人は、来迎なくしては、辺地・胎生・懈慢界にさえも生まれることができない、という厳しい表現になっており、それゆえに、自力の行人の臨終に、来迎を誓ってあるという。そして、「真実信心の行人は、攝取不捨のゆへに、正定聚のくらゐに住す。このゆへに、臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心さだまるとき、往生またさだまるなり」という、まことに力強い表現は、聞く者をして、圧倒してやまない言葉である。この消息は、宗祖 79 歳の時に書かれたものである。

同じく、『未灯鈔』には、次のような文がある。

他力のなかには自力とまふすことは候ときさきふらひき。他力のなかにまた他力とまふすことはききさふらはず。他力のなかに自力とまふすことは、雑行・雑修・定心念仏とこころにかけられてさふらふ人々は、他力のなかの自力の人々なり。他力のなかにまた他力とまふすことはうけたまはりさふらはず。なにごと専信房のしばらくゐたらんとさふらへば、そのときまふしきふらふべし。^{〔註6〕}

仮令の誓い・果遂の誓い

『教行信証』には、

経家に拠りて師積を披くに、雑行の中の雑行雑心・雑行専心・専行雑心なり。また正行の中の専修専心・専修雑心・雑修雑心は、これみな辺地・胎宮・懈慢界の業因なり。かるがゆえに極楽に生まるといへども、三宝を見たてまつらず、仏心の光明、余の雑行の行者を照摂せざるなり。仮令の誓願、良に由あるかな。仮門の教、欣慕の積、これいよいよあきらかなり。二経の三心、顕の義に依れば異なり、彰の義に依れば一なり。^{〔註7〕}

おおよそ大小聖人・一切善人、本願の嘉号をもって己が善根とするがゆへに、信を生ずることあたはず。仏智を了らず。かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆえに、報土に入ることなきなり。^{〔註8〕}
第 20 願「果遂の誓い」については、宗祖の、いわゆる三願転入の文には、

ここをもって、愚禿積の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依って、久しく万行・諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る、善本・徳本の真門に回入して、ひとえに難思往生の心を発しき。しかるにいま特に方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。速やかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲う。果遂の誓い、良に由あるかな。ここに久しく願海に入りて広く仏恩を知れり。^{〔註9〕}

『浄土和讃』には、「大経和讃」において、18 願の真実信心を述べられたあと、11 願によって難思議往生を述べ、次に、19 願「至心発願欲生」・20 願「至心回向欲生」の順序次第により、次のように、うたわれている。

- 至心発願欲生と 十方衆生を方便し 衆善の仮門ひらきてぞ 現其人前と願じける (11)
- 臨終現前の願により 釈迦は諸善をことごとく 観経一部にあらわして 定散諸機をすすめけり (12)
- 諸善万行ことごとく 至心発願せるゆへに 往生浄土の方便の 善とならぬはなかりけり (13)
- 至心回向欲生と 十方衆生を方便し、名号の真門ひらきてぞ 不果遂者と願じける (14)
- 果遂の願によりてこそ 釈迦は善本徳本を 弥陀経にあらわして 一乗の機をすすめける (15)

定散自力の称名は 果遂のちかひに帰してこそ をしえざれども自然に 真如の門に転入する(16)

安楽浄土をねがひつつ 他力の信をえぬひとは 仏智不思議をうたがひて 辺地懈慢にとまるなり
(17)^[註10]

「不果遂者」(14)には左訓で、「はた(果)しとけ(遂)むとちかひたまへるなり」とあり、「果遂の願」(15)には左訓で、「つひにはた(果)しとけ(遂)しめむとなり」とある。「果遂のちかい」(16)には、「しりき(自力)のこのころにてみやうかう(名号)をと(称)へたるをはつひにはた(果)しとけ(遂)むとちかひたまふなり」とある。「善本徳本」(15)には左訓で、「いんゐ(因位)をせんぼん(善本)といふ くわゐ(果位)のをとくぼん(徳本)といふ」とあり、「一乗の機」には左訓で、「みちしようき(一乗機)とはほうと(報土)にしやう(生)せしめん」とある。「真如の門に転入」(16)には、左訓で、「ほうしん(報身/法身)のさとりをひら(開)くみ(身)とうつりいるとまうすなり」とある。「辺地懈慢」(17)の左訓に、「きわくたいしやう(疑惑胎生)をへんち(辺地)といふ これ五百歳をへ(経)てほうと(報土)にはまいるなり しよきやうわうしやう(諸行往生)のひとはけまん(懈慢)におつ これらはおくせんまん(億千万)のときまれに一人ほうと(報土)へはすすむなり」とある。

第19願「至心発願欲生」から第20願「至心回向欲生」へと次第することが、「衆善の仮門ひらきてぞ 現其人前と願じける」から「名号の真門ひらきてぞ 不果遂者と願じける」への展開となり、如来の第18願の「至心信楽欲生」から開かれてきた願いであることが、「ひらきてぞ」という、それぞれについて表現されている言葉から知ることができる。それが如来の悲願であることが示されている。

「果遂の誓い」について、『歎異抄』第11章には、

このひとは、名号の不思議をも、また信ぜざるなり。信ぜざれども、辺地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆえに、ついに報土に生ずるは、名号不思議のちからなり。これ誓願不思議のゆえなれば、ただひとつなるべし。^[註11]

とあり、『一念多念文意』には、次のように述べられている。

おほよそ、八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門といふ、これを仮門(左訓 かりなり まことならずとなり)となづけたり。この要門・仮門といふは、すなわち『無量寿仏観経』一部にときたまへる定善・散善これなり。定善は十三観なり、散善は三福九品の諸善(左訓 よろづのぜんといふなり)なり。これみな浄土方便の要門なり、これを仮門ともいふ。この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらえて、本願一乗円融無碍真実功德大宝海におしへすすめいれたまふがゆへに、よろずの自力の善業おぼ、方便の門とまふすなり。……方便とまふすは、かたちをあらわし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまふすなり、すなわち阿弥陀仏なり。^[註12]

報土の信者はおほからず 化土の行者はかずおほし 自力の菩提かなわねば 久遠劫より流転せり(『正像末和讃』49)^[註13]

第19願による観経往生は、双樹林下往生であるが、諸行が観経の定散二善・三福九品として明らかにされている。大経にては三輩段が、第19願の成就文とされている。『教行信証』には、「この願成就の文は、すなわち三輩の文これなり。観経の定散九品の文これなり」^[註14]と記されている。大経の三輩段は、下巻に説かれている。大経下巻は、初めに第11願成就文、次いで、第17・18願成就文が続き、第19願成就文が三輩段として説かれている。

『愚禿鈔』には、次のように述べられている。

おおよそ心について、二種の三心あり。一には自利の三心[サンジン]、二には利他の三信[サンシン]。

また二種の往生あり。一は即往生、二は便往生なり。ひそかに『観経』の三心[サンジン]往生を案ずれば、これすなはち諸機自力各別の三心なり。『大経』の三信[サンシン]に帰せしめむがためなり。諸機を勧誘して三信に通入せしめむと欲うなり。三信とは、これすなはち金剛の真心、不可思議の信心海なり。また即往生とは、これすなはち難思議往生、真の報土なり。便往生とは、すなはちこれ諸機各別の業因果成の土なり。胎宮・辺地・懈慢界・双樹林下往生なり。また難思往生なりと。知るべしと。^[註15]

同じく、『愚禿鈔』に、

仏について四種あり。一には法身、二には報身、三には応身、四には化身なり。

法身について二種あり。一には法性法身、二には方便法身なり。

土について四種あり。一に法身の土、二に報身の土、三に応身の土、四に化身の土なり。

弥陀の化土について二種あり。一に疑城胎宮、二つに懈慢辺地。^[註16]

定散諸機各別の 自力の三心ひるがへし 如来利他の信心に 通入せむとねがふべし^[註17]

釈迦は要門ひらきつつ 定散諸機をあわれみて 正雜二行方便し ひとえに専修すすめしむ p 495

助正ならべて修するをば すなわち雜修となづけたり 一心をえざるひとなれば 仏恩報ずるところなし
仏号むねと修すれども 現世をいのる行者おぼ これも雜修となづけてぞ 千中無一ときらわる^[註18]

「千中無一」に左訓あって、「せん(千)かなか(中)にひとりもむまれず(生まれず)となり ゑかむせんし(懐感禪師)のしやく(釈)にはまんふみちしやう(万不一生)としやく(釈)せられたり」とある。「正信念仏偈」には、源信章に、

專雜の執心、淺深を判じて、報化二土、正しく弁立せり。^[註19]

とあり、『尊号真像銘文』にも、次のようにある。

しかれば源信和尚は、報土にむまるる人はおほからず、化土にむまるる人はすくなからずとのたまへり。^[註20]

諸行往生

至心発願の願成就の文。『大經』にのたまはく。「仏、阿難に告げたまはく、十方世界の諸天人民、それ心を至してかの国に生れむと願することあらむ。おほよそ三輩あり、その上輩は、家を捨てて欲を棄てて沙門となり、菩提心を発して、一向にもつばら無量寿仏を念じ、もろもろの功德を修してかの国に生れむと願ぜむ。これらの衆生、寿終らむ時に臨みて、無量寿仏、もろもろの大衆とその人の前に現ぜむ。乃至阿難、それ衆生あつて、今世において無量寿仏を見たてまつらむと欲うて、無上菩提の心を発し、功德を修行してかの国に生れむと願ずべし。仏、阿難に語りたまはく、それ中輩は、十方世界の諸天人民、それ心を至してかの国に生れむと願することあらむ。行じて沙門となり、大いに功德を修することあたはずとみへども、まさに無上菩提の心を発して、一向にもつばら無量寿仏を念じ、多少、善を修し、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、[ゾウ]を懸け灯を燃し、華を散じ香を焼くべし。これをもつて回向してかの国に生れむと願ぜむ。その人、終りに臨みて、乃至つぶさに真仏のごとく、もろもろの大衆とその人の前に現ぜむ。乃至 仏、阿難に告げたまはく、それ下輩は、十方世界の諸天人民、それ心を至してかの国に生れむと欲ふことあらむ。たとひもろもろの功德をなすことあたはずとも、まさに無上菩提の心を発して、一向に意をもつばらにして、乃至十念、無量寿仏を念じて、その国に生れんと願ずべし。もし深法を聞きて歡喜信樂して疑惑を生ぜず、乃至一念、かの仏を念じて、至誠心をもつてその国に生れむと願ぜむ。この人、終りに臨みて、夢にかの仏を見たてまつり、また往生を得ん。功德・智慧、次いで中輩のもののごとくならむとなり」と。以上略抄

『大經』にのたまはく。「たとひわれ仏を得たらむに、国のうちの菩薩、乃至少功德のもの、その道場樹の無量の光色にして高さ四百万里なるを知見することあたはずば、正覚を取らじ」と。

道場樹の願成就の文。『經』にのたまはく。「また無量寿仏、その道場樹の高さ四百万里ならむ。その本周圍五十由旬ならむ。枝葉四に布きて二十万里ならん。一切の衆宝自然に合成せり。月光摩尼持海輪宝衆宝の王たるをもつてして、これを莊嚴せり。条のあひだに周匝して、宝の瓔珞を垂れたり、百千万色にして種々に異変す、無量の光炎照耀極まりなし、珍妙の宝網その上に羅覆せり。乃至一切みな甚深の法忍を得て不退転に住せむ、仏道を成るに至るまで、六根清徹にしてもろもろの悩患なけむ」と。以上略出

第 19 願成就の文として、大經三輩段の「略抄」が經文証として掲げられてある。略された經文を復元するならば、

[上輩] すなはちかの仏に隨いてその国に往生せむ。すなはち七宝華の中より自然に化生し、不退転に住せむ。

[中輩] 無量寿仏、その身を化現せむ。光明相好

[〃] すなはち化仏に隨いてその国に往生し不退転に住せむ。功德智慧、次いで上輩のもののごとくならむとなり。^[註21]

である。広本では「乃至」によって中略されている文章が、略本では、その部分([]部分)が略されずに引用されている。

……珍妙の寶網その上に羅覆せり。[一切の莊嚴、応に隨ふて現ず、微風徐く動いて、諸々の枝葉を吹くに、

無量の妙法の音声を演出す、その声、流布して諸仏の国に徧ず、その声を聞けば、深法忍を得、不退転に住せむ、仏道を成るに至るまで、耳根清徹にして苦患に遭ず、目にその色を覩、耳にその音を聞き、鼻にその香を知り、舌にその味を嘗め、身にその光を触れ、心に法をもって縁じ、]一切みな甚深の法忍を得て、不退転に住せむ、仏道を成るに至るまで、六根清徹にして諸々の悩患なげむと。〔註22〕

第28願道場樹の願とその願成就の文が、方便化土の経証として示されている。『讚阿弥陀仏偈和讃』において、宗祖は、

七寶講堂道場樹 方便化身の浄土なり 十方来生きわもなし 講堂道場禮すべし〔註23〕

とうたわれている。「七寶講堂道場樹」に左訓があり、「ならふ いゑ ふちたうのにはには さうしゆりむけの往生なり」とある。これは、「習う家・仏堂の庭には、双樹林下の往生なり」という字が想定される。蓮如の別写本には、「方便化身の浄土」に左訓があり、「へんちけまんこく(辺地懈慢国)なり きはく(疑惑)たいしやう(胎生)のしやう(生)となり」とある。〔註24〕

方便化身土

首楞嚴院の『要集』に、感禪師の釈を引きていはく、「問ふ、菩薩処胎經の第二に説きたまへり、西方この閻浮提を去ること十二億那由他に、懈慢界ありと。乃至 意を発す衆生、阿弥陀仏国に生れむと欲ふ者、深く懈慢国土に着して、前進みて阿弥陀仏国に生るることあたはず。億千万の衆、時に一人あつて、よく阿弥陀仏国に生ずといへり。この經をもつて准難するに、生を得べしや。答ふ、群疑論に善導和尚の前の文を引きて、この難を釈せり。またみづから助成していはく、この經の下の文にのたまはく、何をもつてのゆへに、みな懈慢して執心牢固ならざるによつてなり、ここに知りぬ、雑修の者は執心牢からざるの人とす。かるがゆゑに懈慢国に生ずるなり。もし雑修せずして、もつばらこの業を行ずるは、これすなはち執心牢固にして、定めて極楽国に生ず。乃至 また報の浄土の生はきはめて少なし、化の浄土の中に生ずる者は少なからず。かるがゆへに經の別説、まことに相違せざるなり」と。以上略出

これらの文のころにて、双樹林下往生とまふすことをよくよくこころえたまふべし。

『一念多念文意』及び消息類には、次のように、述べられている。

『經』に、「無諸邪聚及不定聚」といふは、「無」はなしといふ、「諸」はよろづのことといふことばなり。「邪聚」といふは、雑行雑修万善諸行のひと、報土にはなければなりといふなり。「及」はおよぶといふ、「不定聚」は自力の念仏、疑惑の念仏の人は、報土になしといふなり。正定聚の人のみ眞実報土にむまるればなり。〔註25〕

別解は、念仏をしながら、他力をたのみなり。別といふは、ひとつなることを、ふたつにわかちなすことばなり、解はさとるといふ、とくといふことばなり、念仏をしながら自力にさとりなすなり。かるがゆへに、別解といふなり。また助業をこのむもの、これすなわち自力をはげむひとなり。自力といふは、わがみをたのみ、わがこころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまさまの善根をたのみひとなり。〔註26〕

おおよそ八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門という、これを仮門となづけたり。この要門・仮門といふは、すなはち『無量寿仏觀經』一部にときたまへる定善・散善これなり。定善は十三觀なり、散善は三福九品の諸善なり。これみな浄土方便の要門なり、これを仮門ともいふ。この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらへて、本願一乘円融无碍眞実功德大宝海におしへすすめいたまふがゆへに、よろずの自力の善業おぼ、方便の門とまふすなり。〔註27〕

御同行の、臨終を期してとおほせられさふらふらんは、ちからをよばぬことなり。信心まことにならせたまひてさふらふひとは、誓願の利益にてさふらふうへに、摂取してすてずとさふらへば、来迎・臨終を期せさせたまふからずとこそおほえさふらへ。いまだ信心さだまらざらんひとは、臨終をも期し来迎をもまたせたまふべし。〔註28〕

觀經の三心をえてのちに大經の三信心をうるを一心をうるとはまふすなり。このゆへに大經の三信心をえざるおぼ一心かくるとまふすなり、この一心かけぬれば眞の報土に 生まれずといふなり。觀經の三心は定散二機の心なり、定散二善を廻して大經の三信をえむとねがふ方便の深心と至誠心とするべし、眞実の三信心をえざれば、即不得生といふなり。即はすなわちといふ、不得生といふは、むまるゝことをえずといふな

り。三信かけぬるゆへにすなわち報土にむまれずとなり。雑行雑修して定機・散機の人、他力の信心かけたるゆへに、多生曠劫をへて他力の一心をえてのちにむまるべきゆへにすなわちむまれずといふなり。もし胎生辺地にむまれても五百歳をへ、あるいは億千万衆の中に、ときにまれに一人、真の報土にはすゝむとみえたり、三信をえむことをよくよくこころえねがふべきなり。^[註29]

たづねおほせられ候念仏の不審のこと、念仏往生と信ずるひとは辺地の往生とてきはれ候らんこと、おほかたこころえがたく候。そのゆへは、弥陀の本願とまふすは、名号をとへんものをば極楽へむかへんとちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候なり、信心ありとも、名号をとへざらんは詮なく候。また一向名号をとへふとも、信心あさくば往生しがたく候。されば念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとへんずるは、うたがひなき報土の往生にてあるべく候なり。詮ずるところ、名号をとへふといふとも、他力本願を信ぜざらんは、辺地にむまるべし。本願他力をふかく信ぜんともがらは、なにごとにかは辺地の往生にてさふらふべき。このやうをよくよく御こころえ候て御念仏さふらふべし。この身は、いまは、としきはまりてさふらへば、さだめてさきだちて往生しさふらはんずれば、浄土にてかならずかならずまちまいらせさふらふべし。^[註30]

それ浄土真宗のこころは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすでに天竺の論家・浄土の祖師のおほせられたることなり。まづ自力とまふすことは、行者のおのおの縁にしたがひて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからひのこころをもて、身口意のみだれごころをつくるひ、めでたうしなして浄土へ往生せんとおもふを自力とまふすなり。また他力とまふすことは、弥陀如来の御ちかひの中に、選択摂取したまへる第十八の念仏往生の本願を信樂するを他力とまふすなり。如来の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと、聖人のおほせごとにてありき。義といふことは、はからうことばなり。行者のはからひは自力なれば、義といふなり。他力は本願を信樂して往生必定なるゆへに、さらに義なしとなり。しかれば、わがみのわるければいかでか如来むかへたまはむとおもふべからず、凡夫はもとより煩惱具足したるゆへにわるきものとおもふべし。またわがこころよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからいにては真実の報土へむまるべからざるなり。行者のをのの自力の信にては、懈慢・辺地の往生、胎生疑城の浄土までぞ、往生せらるゝことにてあるべきとぞうけたまはりたりし。……仏恩のふかきことは、懈慢・辺地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、弥陀の御ちかひのなかに、第十九・第二十の願の御あわれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ。仏恩のふかきこと、そのきわもなし。いかにはんや、真実の報土へ往生して大涅槃のさとりをひらかんこと、仏恩よくよく御安どもさふらふべし。これさらに性信坊・親鸞がはからひまふすにはあらず候。^[註31]

「すでにして悲願います」ということは、「仏恩のふかきことは、懈慢・辺地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、弥陀の御ちかひのなかに、第十九・第二十の願の御あわれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ。仏恩のふかきこと、そのきわもなし」ということのゆえにである。

弥陀経往生

弥陀経往生といふは、植諸徳本の誓願によりて不果遂者(左訓 はたしとげずばといふなり)の真門に在り、善本・徳本の名号をえらびて、万善諸行の少善をさしおく、しかりといふども、定散自力の行人は、不可思議の仏智を疑惑(左訓 うたがふなり)して信受せず、如来の尊号をおのれが善根として、みづから浄土に回向して果遂(左訓 ついにはたすべしとなり)のちかひをたのみ、不可思議の名号を称念しながら、不可称不可説不可思議の大悲の誓願をうたがふ、そのつみふかくおもくして、七宝の牢獄にいましめられてのち五百歳のあひだ自在なることあたはず、三宝をみたてまつらず、つかへたてまつることなしと、如来はときたまへり。しかれども如来の尊号を称念するゆゑに胎宮(左訓 はらまるるなり)にとどまる。徳号によるがゆへに難思往生(左訓 じりきのねむぶちしやなり)とまふすなり、不可思議の誓願、疑惑(左訓 うたがふまどふ)するつみによりて難思議往生(左訓 ほんぐわんたりきのわうじやうとまふす)とはまふさずとするべきなり。

植諸徳本の願文。『大経』にのたまはく。「たとひわれ仏を得むに、十方の衆生、わが名号を聞きて、念をわが国に係けて、もろもろの徳本を植えて心を至し回向してわが国に生れむと欲はむ、果遂せずば(左訓 はたしとげずばといふはついはたさむとなり)、正覚を取らじ」と。

同本異訳の『無量寿如来会』にのたまはく。「もしわれ成仏せむに、無量国のうちの所有の衆生、わが名を説かむを聞きて、おのれが善根をもつて極楽に回向せば、もし生れずば、菩提を取らじ」と。

願成就の文。『経』にのたまはく。「それ胎生の者の、処する所の宮殿、あるいは百由旬、あるいは五百由旬なり、おのおのその中にして、もろもろの快樂を受くること、[トウ]利天上のごとし。またみな自然なり。その時慈氏菩薩、仏にまふしてまふさく、世尊、何の因何の縁にか、かの国の人民、胎生化生なると。仏、慈氏に告げたまはく、もし衆生あつて、疑惑の心をもつてもろもろの功德を修し、かの国に生れむと願じて、仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了らずして、この諸智において疑惑して信ぜず、しかるになほ罪福を信じて、善本を修習して、その国に生れむと願ぜむ、このもろもろの衆生、かの宮殿に生れて寿五百歳ならむ、つねに仏を見たてまつらず、経法を聞かず、菩薩声聞聖衆を見ず、この故にかの国土、これを胎生といふ。乃至弥勒まさに知るべし、かの化生の者は智慧勝れたるがゆへに、その胎生の者はみな智慧なし。乃至 仏、弥勒に告げたまはく、たとへば転輪聖王に七宝の牢獄あり、種々に莊嚴し床帳を張設し、もろもろの[ゾウ]幡を懸けたらむ、もしもろもろの小王子、罪を王に得たらむ、すなはちかの獄のうちに内れて繋ぐに金の鎖をもつてせむのごとし。乃至 仏、弥勒に告げたまはく、このもろもろの衆生、またまたかくのごとし。仏智を疑惑するをもつてのゆへに、かの胎宮に生ず。乃至 もしこの衆生、その本の罪を識りて、深くみづから悔責(左訓 くみせめて)してかの処を離れむと求めよ。乃至 弥勒まさに知るべし、それ菩薩あつて疑惑を生ずるは、大利を失ふとす」と。

略抄

また『無量寿如来会』にのたまはく、「仏、弥勒に告げたまはく、もし衆生あつて、疑悔(左訓 うたがふころ)に随ふて善根を積集(左訓 つみあつむ)して、仏智・普遍智・不思議智・無等智・威徳智・廣大智を希求せむに、みづからの善根において信を生ずることあたはず、この因縁をもつて、五百歳において宮殿のうちに住すと。乃至 阿逸多(左訓 みろくぼさちなり)、汝、殊勝智の者を観そなはずに、かの広慧の力によるがゆへに、かの化生を受く、蓮華の中において結跏趺坐す、汝、下劣の輩を観そなはずに、乃至 もろもろの功德を修習することあたはざるがゆへに、因なくして無量寿仏に奉事せむ、このもろもろの人等、みな昔疑悔(左訓 うたがう)せしに縁つて致すところとするなりと。乃至 仏、弥勒に告げたまはく、かくのごとし、かくのごとし、もし疑悔に随ふて、もろもろの善根を種ゑて、仏智乃至廣大智を希求することあらむ、みづからの善根において信を生ずることあたはず、仏の名を聞きて信心を起すによるがゆへに、かの国に生るといへども、蓮華のうちにおいて出現することを得ず、かれらの衆生、華胎のうちに処すること、園苑宮殿(左訓 うしろのそのまへのその)の想のごとし」。乃至略出

光明寺の釈にいはく。「華に含んでいまだ出でず、あるいは辺界に生じ、あるいは宮胎に墮す」と。以上
憬興師のいはく。「仏智を疑ふによつて、かの国に生るといへども、辺地にあつて聖化の事を被らず、もし胎生せば、よろしくこれを重く捨つべし」と。以上 これらの真文にて、難思往生とまふすことを、よくよくこころえさせたまふべし。

弥陀経往生の最初の総論にあたる文章は、広本と略本とで、趣旨は同様であり、語られる語彙もほぼ共通しているにもかかわらず、文章自体は、かなり相違している。略本には宗祖の真筆本があるが、広本にはなく、広本の真筆が疑われる理由の一つになっているが、略本には還相回向に言及する言葉がないという点で、大きな相違点がある。略本の弥陀経往生の最初の総論にあたる文章は、以下の如くである。

弥陀経往生といふは、不果遂者の誓願によりて、植諸徳本の真門にいる。諸善万行を貶して少善根となづけたり。善本・徳本の名号をえらびて、多善根・多徳徳とのたまへり。しかるに係念我国の人、不可思議の仏力を疑惑して信受せず、善本・徳本の尊号を、おのれが善根とす。みづから浄土に回向せしむ、これを弥陀経の宗とす。このゆへに弥陀経往生といふ、他力の中の自力なり。尊号を称するゆへに疑城胎宮にむまるといへども、不可称不可説不可思議の他力をうたがふそのつみおもくして、牢獄にいましめられていのち五百歳なり。尊号の徳によるがゆへに、難思往生とまふすなり。^[註 32]

宗祖の『愚禿鈔』においては、次のように、分類されている。

大乘教について、二教あり。一には頓教、二には漸教なり。

頓教について、また二教二超あり。

二教とは、

一には難行 聖道の実教なり。いわゆる仏心・真言・法華・華嚴等の教なり。

二には易行 浄土本願真実の教、『大無量寿経』等なり。

二超とは、

一には豎超 即身是仏、即身成仏等の証果なり。

二には横超 選択本願、真実報土、即得往生なり。

漸教について、また二教二出あり。

二教とは、

一には難行道 聖道権教、法相等歴劫修行の教なり。

二には易行道 浄土要門、『無量寿仏観経』の意、定散・三福・九品の教なり。

二出とは、

一には豎出 聖道、歴劫修行の証なり。

二には横出 浄土、胎宮・辺地・懈慢の往生なり。^{〔註33〕}

同じく、『愚禿鈔』には、末尾の言葉で、次のように述べられている。

ひそかに『観経』の三心往生を案ずれば、これすなはち諸機自力各別の三心なり。『大経』の三信に帰せしめむがためなり。諸機を勧誘して三信に通入せしめむと欲ふなり。三信とは、これすなはち金剛の真心、不可思議の信心海なり。また即往生とは、これすなはち難思議往生、真の報土なり。便往生とは、すなわちこれ諸機各別の業因果成の土なり。胎宮・辺地・懈慢界・双樹林下往生なり、また難思往生なりと。知るべしと。^{〔註34〕}

このことは、『浄土和讃』「観経意」にも、

定散諸機各別の 自力の三心ひるがへし 如来利他の信心に 通入せんとねがふべし^{〔註35〕}

真実信心えざるをば 一心かけぬとおしへたり 一心かけたるひとはみな 三信具せずとおもふべし^{〔註36〕}

仏智疑惑の罪

第19・20願の機に、仏智疑惑の罪あることは、『大経』「下巻」の教説に説かれていることである。『浄土三経往生文類』本文においては、「乃至」という語によって、略抄という形ではあるが、かなりの部分が引用されている。初めの「乃至」では、略されたのではなく、補足されている。

弥勒まさに知るべし、かの化生の者は智慧勝れたるがゆへに、その胎生の者はみな智慧なし。

「乃至」で略された部分は、次の言葉である。

「飲食・衣服・床褥・華香・伎楽を供給せんこと、転輪王のごとくして乏少するところなけむ。意において云何ぞ。このもろもろの王子、むしろかの処を楽いてむや、いなや」と。対へて曰さく、「いななり。但種種の方便をしてもろもろの大力を求めて自ら免出せむと欲う」と。

すなわち意のごとくなることを得て、無量寿仏の所に往詣して恭敬供養せむ。また遍く無量無数の諸余の仏の所に至ることを得て、もろもろの功德を修せむ。

「このゆえに应当に明らかに諸仏無上の智慧を信ずべし」と。^{〔註37〕}

いづれにおいても、仏智疑惑の罪を明らかにする言葉以外が、「乃至」によって略されていると考えられる。本文では、三宝を見たてまつらずということが厳しく言われている。仏・法・僧を見失っている姿は、人としての自己を見失っている姿である。帰依三宝の者として、人ははじめて、自己を回復する者となるからである。

仏智疑惑の罪過は、23首の和讃によって、詳細に言い表わされている。

不了仏智のしるしには 如来の諸智を疑惑して 罪福信じ善本を たのめば辺地にとまるなり(1)

仏智の不思議をうたがひて 自力の称念このむゆへ 辺地懈慢にとどまりて 仏恩報ずるころなし(2)

罪福信ずる行者は 仏智の不思議をうたがひて 疑城胎宮にとどまれば 三宝にはなれたてまつる(3)

仏智疑惑のつみにより 懈慢辺地にとまるなり 疑惑のつみのふかきゆへ 年歳劫数をふるととく(4)

転輪皇の王子の 皇につみをうるゆへに 金鎖をもちてつなぎつつ 牢獄にいるがごとくなり(5)

自力称名のひとはみな 如来の本願信ぜねば うたがうつみのふかきゆへ 七宝の獄にぞいましむる(6)

信心のひとにおとらじと 疑心自力の行者も 如来大悲の恩をしり 称名念仏はげむべし(7)

自力諸善のひとはみな 仏智の不思議をうたがへば 自業自得の道理にて 七宝の獄にぞいりにける(8)

仏智不思議をうたがひて 善本徳本のむひと 辺地懈慢にむまるれば 大慈大悲はえざりけり(9)
 本願疑惑の行者には 含花未出のひともあり 或生辺地ときらひつつ 或墮宮胎とすてらるる(10)
 如来の諸智を疑惑して 信ぜずながらなほもまた 罪福ふかく信ぜしめ 善本修習すぐれたり(11)
 仏智を疑惑するゆへに 胎生のもは智慧もなし 胎宮にかならずむまるるを 牢獄にいるとたとえたり
 (12)
 七宝の宮殿にむまれては 五百歳のとしをへて 三宝を見聞せざるゆへ 有情利益はさらになし(13)
 辺地七宝の宮殿に 五百歳までいでずして みずから過咎をなさしめて もろもろの厄をうくるなり(14)
 罪福ふかく信じつつ 善本修習するひとは 疑心の善人なるゆへに 方便化土にとまるなり(15)
 弥陀の本願信ぜねば 疑惑を帯してむまれつつ はなはすなわちひらけねば 胎に処するにたとへたり
 (16)
 ときに慈氏菩薩の 世尊にまふしたまひけり 何因何縁いかなれば 胎生化生となづけたる(17)
 如来慈氏にのたまはく 疑惑の心をもちながら 善本修するをたのみにて 胎生辺地にとどまれり(18)
 仏智疑惑のつみゆえに 五百歳まで牢獄に かたくいましめおはします これを胎生とときたまふ(19)
 仏智不思議をうたがひて 罪福信ずる有情は 宮殿にかならずむまるれば 胎生のもときたまふ(20)
 自力の心をむねとして 不思議の仏智をたのまねば 胎宮にむまれて五百歳 三宝の慈悲にはなれたり
 (21)
 仏智の不思議を疑惑して 罪福信じ善本を 修して浄土をねがふをば 胎生といふときたまふ(22)
 仏智うたがふつみふかし この心おもひしるならば くゆるころをむねとして 仏智の不思議をたのむ
 べし(23)^[註38]

草稿本によると、「不了仏智」(1)に左訓あり、「仏智疑惑罪過」とある。「金鎖」(5)に左訓あり、「わう(皇)のこ
 (子)なればとて こかね(黄金)のくさり(鎖)にてつな(繫)かむとたと(喩)へたり」、「牢獄」(5)に左訓、「しりき
 (自力)のねむふちしや(念仏者)をわう(皇)のこ(子)のつみ(罪)ふか(深)くしてこく(獄)にいまし(誠)むるにたと
 (喩)ふるなり」とある。「含華未出」(10)に左訓あり、「はな(華)にふく(含)まるるなり」、「或生辺地」(10)に左訓、
 「あるいはへんち(辺地)にむまるるといふ」、「或墮宮胎」(10)に左訓、「あるいはくたい(宮胎)にお(落)つといふ」
 「顕智本」によったが、「草稿本」には、末尾に、「已上疑惑罪過二十二首 仏智うたがふつみとがのふかきことを
 あらはせりこれをへんじけまんたいしやうなんどといふなり」とあり、仏智うたがう罪ふかきことを、自力の行の
 陥る大きな過失であることを、非常に縷々詳細にうたっておられる。罪福信の信仰は、仏智不思議を疑惑する
 ことであるという。「罪福ふかく信じつつ 善本修習するひとは 疑心の善人なるゆえに 方便化土にとまるなり」
 (15)と語られた中に、「疑心の善人」という表現が、常識的にはすぐには理解できないような表現に思われるのは、
 我々が、罪福信の信仰に深くとらわれているからである。罪福信は常識に沿っている。仏智不思議の世界は、常
 識を破る世界であり、そういう意味で文字通り、非常識であり、人間の理知の世界を、ひるがえす世界である。
 罪福信ずる人には、仏智不思議を疑惑する罪があるということは、常識がひるがえされた真実報土の世界へ転入
 されることを勧めているのである。ここには、人が、それほどまでに、他力回向を疑い、自我信仰・自力信仰を
 捨て切れない存在であることを洞察したもう如来の深い智慧がはたらいている。

『歎異抄』の第17章には、辺地往生のことで、次のように説かれている。

辺地往生をとぐるひと、つるには地獄におつべしといふこと。この条、なにの証文にみへさふらうぞや。
 学生だつるひとのなかに、いひいださるることにてさふらうなるこそ、あさましくさふらへ。経論正教をば、
 いかやうにみなされてさふらうらん。信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、辺地に生じてうたが
 ひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらくとこそ、うけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆ
 へに、化土におほくすすめいれられさふらうを、つるにむなしくなるべしとさふらうなるこそ、如来に虚妄
 をまふしつけまひらせられさふらうなれ。^[註39]

法然上人は、「浄土宗のひとは、愚者になりて往生す」と語られたと言われている。「さかさかしき知恵」がくじ
 かれて帰らせてもらおう大地は、もともと本来の人間であることの大地にほかならない。宗祖の『愚禿鈔』には、
 整然と、愚者になる世界が述べられている。

賢者の信を聞きて、愚禿が心を顕す。賢者の信は、内は愚にして、外は賢なり。愚禿の信は、内は賢にし
 て、外は愚なり。^[註40]

自力信仰・罪福信の人は、外は賢善精進の姿であり、賢なりであるが、内は愚である。仏智不思議を信ぜず、疑惑するからである。しかし、仏智不思議を信ずる人は、外は愚なりであるが、内は賢である。仏智とともにあるからである。自己の中に、誇るべきものがあるうちは、内が無明であることが見え、外はさかきかしき知恵をほこる賢である。しかし、自己において、内に無明の闇を見るには、仏智によるほかはない。そこには、無明の闇を自己として明らかにする光としての智慧が仰がれており、外には愚と名のすることもない。如来の第19・20願から、「雑行をすてて本願に帰す」と言われた第18願への転入は、「愚者になりて往生す」と言われる相である。愚者とは、別の言葉で言うならば、凡夫ということである。凡夫になりて往生する。もともと凡夫であったのであるから、凡夫に帰る。帰らせてもらうには、本願他力によるほかはない。

宗祖の『三経往生文類』は、83歳の真蹟本が「略本」と言われ、85歳の「広本」も写本で残されている。善鸞義絶が84歳の時の出来事であるから、関東の門弟たちのために、三経往生の要文を書き記され、送り届けられたものである。

目もみえず候。なにごとみみなわすれて候うえに、ひとなどにあきらかにまふすべき身にもあらず候。よくよく浄土の学生にとひまふしたまふべし。^[註41]

この身は、いまは、としきはまりてさふらへば、さだめてさきだちて往生しさふらはんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまいらせさふらふべし。^[註42]

その時期には、消息も多く門弟たちに宛てて書かれている。宗祖の手紙の文面には、「往生」を、死後往生の意味で語られる表現が見うけられる。概して、関東の門弟への仮名聖教類は、「往生といふは浄土にむまるといふ也」^[註43]のごとく、死後往生の意味で語られる。しかしながら、宗祖は、『教行信証』においては、ご自釈においては、往生を、そのような意味で語られることはない。『愚禿鈔』において、非常に明瞭に語られているように、

本願を信受するは前念命終なり「即ち正定聚の数に入る」「即の時、必定に入る」「また必定の菩薩と名づくるなり」

即得往生は後念即生なり 他力金剛心なり。知るべし。便ち弥勒菩薩に同じ。自力金剛心なり、知るべし。大経には「次如弥勒」とのたまへり。^[註44]

とあるように、即得往生は、本願信受の信の一念において決まる。他力回向によって決まる。往生とは、往という超越的なものにふれてこの世を生きることであり、と言われることがあるが、願生浄土ということが、浄土に生まれんと願する往相の道において、還相回向との出遇いにおいて、願いに生きる者、願生者となることを明かすように、往生浄土との歩みは、還相回向との出遇いにおいて、本願に出遇って、本願を生きる人となる。「敬ひて一切の往生人等にまふさく」(『教行信証』)^[註45]と宗祖が言われるような、真実を求めて生きるひと、往生人となる。

『教行信証』「化身土巻」において、まず経文証として、第19願文、『悲華経』の文、ついで、「願成就の文は三輩の文、観経の定散九品の文、これなり」というご自釈により、三輩の文も、定散九品の文も、本文を掲げず、指示するにとどめられている。ついで、道場樹の願成就文、大経の「胎生の者の処する宮殿」の文、同じく、如来会、群疑論と列挙されていく。ついで、第20願に関しては、願文、願成就文、東方偈の文、如来会、平等覚経等と列挙されていく。

ところが、この『浄土三経往生文類』においては、『教行信証』では指示だけにとどめられていた大経三輩の文が、本文を掲げられていたり、経文証の文が第19願と第20願とで、入れ替わっていたりしている。『教行信証』では第19願文のあとにだされていた如来会の文が、この『浄土三経往生文類』では、第20願文のあとに列記されている。このことは、既に指摘されていることであるが、化身土巻においては、第19願の自力による諸行往生は、第20願の自力念仏をも含んでいるがゆえに、如来会の仏智疑惑の経文は、第19願文のあとに列記されていたが、しかし、この『浄土三経往生文類』では、第20願文のあとに列記することとなったことが指摘されている。如来の念仏に出遇いながら、自力回向しようとする姿、自力を離れられずに念仏を称える姿を、より厳しく仏智疑惑として明らかにされているのである。

『歎異抄』には、「念仏者は無碍の一道なり。天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし」という有名な言葉があるが、『教行信証』の思想とどのように対応しているのかを考えるならば、当然のことながら、如来の第11願「正定聚に住し、必ず滅度に至る」という必至滅度の願から出てきているのであるが、必至滅度する道は、如来の他力回向の道であるがゆえに、一道である。他力回向によって、往相も還相も真実に成り立っている。

往相の道には、有碍なるものが待ち受けているはずであるが、有碍が無碍へと転ずるのは、還相回向のゆえである。「化身土巻」においても、巻頭に、「涅槃経に言はく、仏に帰依せば、ついに、また、その余の諸天神に帰依せざれと」引用されているが、その表現が逆転して、天神地祇が念仏者に敬伏するのであり、魔界外道も念仏者の道を障碍することなし、という表現となるのである。

「法を求める」ということと、「法に生きる」ということとは、別にあることではない。「法を求める」という往相において、還相するはたらきに出遇うことが、「法に生きる」生活である。「法を求める」ことをずっと続けた結果として、やがて、後で「法に生きる」ということが待っているのではなく、往相を、刻々と往相たらしめてやまないはたらきが還相としてはたらいている。「往生極楽のみち」といわれ、「生死いづべきみち」と言われる願生浄土の道は、「浄土に生まれんと願ず」という往相の道において、「浄土の名を称えて、願いに生きる」生活が開かれようとする還相の菩薩の志願と出遇う。往生ということとは、往生浄土の道をあおいで、穢土を生きようとする生活が開かれることである。浄土に「生まれる」往相は、穢土を「生きる」還相の生活を開く。「国土の名が仏事をなす」という『浄土論註』の言葉がある。如来の第18願が開く、ただ念仏もうす生活。如来の第19願が、諸行往生の道をも、「他力のなかの自力」として救い止め、仮令の誓いによる回入がうながされている。如来の第20願が、念仏者の中にある仏智疑惑の罪を厳しく指摘し、その人に、果遂の誓いによって、転入をうながそうとする。第20願の自力回向の念仏者に仏智疑惑の罪あることを見破るのは、第18願の絶対他力回向の世界において他にはない。それほどまでに、わが身が、自力執心の身であることを見破る、とても厳しいまなざしがここにはある。

註

註1 『定本親鸞聖人全集』(以下『定親全』と略記)第三巻和文篇, 28頁以下, 2008年, 法蔵館。『浄土三経往生文類』(広本)テキスト本文をアンダーラインによって示す。

註2 『定親全』第一巻, 269-270頁。

註3 『定親全』第一巻, 295頁

註4 『定親全』第一巻, 133頁

註5 『定親全』第三巻書簡篇, 60-61頁

註6 『定親全』第三巻書簡篇, 103頁

註7 『定親全』第一巻, 291-292頁

註8 『定親全』第一巻, 309頁

註9 『定親全』第一巻, 309頁

註10 『定親全』第二巻和讃篇, 41-42頁

註11 『定親全』第四巻, 15-16頁

註12 『定親全』第三巻和文篇, 144-146頁

註13 『定親全』第二巻和讃篇, 183頁

註14 『定親全』第一巻, 271頁

註15 『定親全』第二巻漢文篇, 50-51頁

註16 『定親全』第二巻漢文篇, 9-10頁

註17 『定親全』第二巻和讃篇, 50頁

註18 『定親全』第二巻和讃篇, 109-110頁

註19 『定親全』第一巻, 109-110頁

註20 『定親全』第三巻和文篇, 46頁

註21 『真宗聖教全書』一, 三経七祖部, 24-25頁

註22 『定親全』第三巻和文篇, 11-12頁

註23 『定親全』第二巻和讃篇, 24頁

註24 『定親全』第二巻和讃篇, 同頁

註25 『定親全』第三巻和文篇, 138頁

註26 『定親全』第三巻和文篇, 142頁

註27 『定親全』第三巻和文篇, 144-145頁

註28 『定親全』第三巻書簡篇, 105頁

- 註 29 『定親全』第三卷書簡篇, 177-178 頁
註 30 『定親全』第三卷書簡篇, 87-89 頁
註 31 『定親全』第三卷書簡篇, 63-68 頁
註 32 『定親全』第三卷和文篇, 13-14 頁
註 33 『定親全』第二卷漢文篇, 3-5 頁
註 34 『定親全』第二卷漢文篇, 50-51 頁
註 35 『定親全』第二卷和讃篇, 50 頁
註 36 『定親全』第二卷和讃篇, 116 頁
註 37 『真宗聖教全書』一, 三經七祖部, 43-44 頁
註 38 『定親全』第二卷和讃篇, 188-201 頁
註 39 『定親全』第四卷言行篇, 32-33 頁
註 40 『定親全』第二卷漢文篇, 3 頁
註 41 『定親全』第三卷和文篇, 82 頁
註 42 『定親全』第三卷和文篇, 88-89 頁
註 43 『定親全』第三卷和文篇, 94 頁
註 44 『定親全』第二卷漢文篇, 13 頁
註 45 『定親全』第一卷, 82 頁